

貴郎は貴郎自身か私かを非難し様とはお思ひなさらぬのですか？」

「決して一總て善く行たのだから」

「貴郎」と云つて私は彼の注意を惹く爲に其の腕に觸り乍ら「お聴ください！

何故貴郎はお望なされる通り話してくださいならぬのすか、私が貴郎の意と適ふ様に

とお仰らぬのですか？何故貴郎は絶対の自由を私に許したのです、まだ私は其を

善く用ゆる程の智慧がないのですもの。何故貴郎は私に教わくださるのを止た

のでしよう？若し貴郎に、決心があまりでしたならば、若し他の方向へ私を導

いてくださいましたなら、決して決して今日の様な事にはならなかつたでしように」

と云ふ調子は段々氣力が籠て冷やかな非難と感を示し、昔の愛情の跡もありま

せん。

「何が無い筈だと云ふのですが？」と驚いて尋ねて、私の方に向き直つて「何

も不正な事がないに、萬事都合に行つてるのに」と微笑して答へる

「それでは過ぎ去たものを悲しとは思ひませんか？」と追かけて出問し、心は

「私の云ふ意味が解らぬ筈はないに、其れとも、解うと試みぬのは私が悪

い爲かしら？」と思ふと眼に涙が浮んで來ました。

「實際私 が貴郎の眼に罪ある者でないならば、貴郎はそんなに無愛相にして

私を懲しなさる筈がないわ、お叱さへなさるんだもの。」と突然叫び「私が

大切に居たものを俄かに私から奪のはつまり私に咎があるからでしよう？」

「どうしたと云ふのです、ゑこれ？」と尋ねる

「いる、云はしてください……貴郎は私から貴郎の愛も、信任も、尊敬すらも

剝去たのですもの。貴郎が私を愛してくださいださるとは信じません、此の長の月歲

私を惱ました始末を一切話す好機會ですから話さしてください！」と私は叫

んで彼にも云はせず「私が人生を知ぬと云ふのが責可き事でしょうか、貴郎は人生の知識を得る爲めに私を放つて置きながら却て責めるのですか？……必

要である限の者を私が學んだのも、貴郎の心に従かふ爲に一年間悶へ通したのも、認めてくださらぬのですもの、其に貴郎は私を罪のあるものとも、白徒とも思つて入らしやるのです。左様です、貴郎は、貴郎も不幸にし私も不幸にする様な生涯に投げ返そうとなさるのですー」

「だが何時僕は斯な事をしたのか？」と良人は驚き呆れて尋ねた。
「貴郎は昨夜もお仰つたでしょう、私が茲の田舎で暮すのを満足に思はぬの、實際私に嫌つて居るにペナルスブルグに行かなければならぬのと絶すお仰つたではありませんか」更に私は斯ふ云ふた、私の意見に讃成して下さる處か、曖昧な不親切な事許りお仰つて、そして若し私が失敗すれば、貴郎は私を非難し私の失敗を喜んで入らしやる癖に」
「お止しーお止しー」と嚴かにも冷然と「卿の云ふのは正當でない、唯だ私に對して辭見を持つてるので……」

「私が貴郎を愛さぬとお仰るのですか」と云て彼に言葉を繼せず、泣き崩れ、ベンチに坐つてハンカチーフで顔を覆たでした。

「アノ様に私を誤解して居るからー」と考へて歎歎を制め様と力めると「自分達の昔の愛情は了つたのかしら」と心の内で何もものが囁やく
良人は敢て私を慰さめ様ともしないのは、多分私の云た事を腹立たからでしよう。コウ云ふ聲も静かで、艶氣もありませんない。

「何の爲に卿が僕を非難するのか不思議だ、若し僕が卿を以前の様に愛さない」と云ふ意味ならば……」
「愛情ですつてー」と私は云て、口惜涙にシク／＼濡たハンカチーフで顔を隠し「愛情の失くなつたのは時と私共自身も共に悪のです。人生には其の時々、異な愛情があるのですもの……」

良人は無言であつたがやがて。

「一切打ち開て憇いと云ふならば、實際の事を談して聞せましようか。初めて僕が卿を知った時、卿の事を考へて夜も睡れぬ事があつた。そして自分の理想の愛と云ふものを描て見たのです。ところが此の愛情が段々と發達したでしよう。其からベテルスブルグに行く、外國に出掛る、そして夜睡れぬ様な事もなくなると、此の愛情をきれ〜に引裂てから、私を苦しめる事もなくなりました。いや愛情を壊はしたのでない、唯だ私を苦めた部分を壊つた丈で、自分も沈着て来る、今以て卿を愛して居るが、今迄とは異つた愛情です。」

「貴郎は愛情だとお仰けれど、却つて苦痛でしよう〜」と私は叫び「貴郎が私を愛するのが止まる程社交界に出入するのが悪かつたなら、何故其をお留なさらぬのですか」

「いや、社交ではない」

「何故貴郎は良人たるの権力で私を縛るとも殺すともしてくださらぬのです」

か。私の幸福となる可きものを悉く私から奪去るより其の方が一層私に善つたのです、また耻辱にもならず」と云つてまたも歉歎して顔を隠した。

此の時ンヤとカトヤは、樂そうに、高聲して、笑乍ら平場へ来て、私共を見て静まり返り、直ちに出て行きました。

彼等が出て行てからも、暫らくは無言の行で濟ます。泣き度丈泣て、ホツトとして良人を見ると彼は頭を手で支へて、何か云はふとしたが、深い溜息を洩らして、矢張腕に倚れて居る。

私は彼の方に行て、手を取ると、良人は考へ深く私を見めて。

「左様、我々、特に婦人には人生のあらゆる些末な事にも經驗するのが人生其の者に還る爲めに必要です。人の話は信用できぬ。彼の時は人生の此の華やかな、面白い經驗を得るは、余程時があつたので、勝手に卿が、自分の趣味を撰ぶに任し、そして自分はまた卿を妨げる権利がないと思つた、卿に干涉するの

は余程以前の事で」と云ひ繼ぐ。

「何故そんならば、私と共に暮し、私を愛すと云ひ乍ら人生の此の些末な経験を勝手にさしたのですか？」と私が云ふと。

「何故で、卿は慾望はあつたにしろ、僕を信ずるの力は持たなかつた、卿は自身で人生を學ばなければならぬので、そして學び得たのです」

「貴郎のお仰る理窟は充分ですが」と云て「然し貴郎の愛情は少なかつたわ」二人はまた沈黙に耽る。

「卿の今の言葉は、酷いが、其は實際其の通り」と云て途切て、俄に立ち上り平場を上へ下へ歩み初める。「左様其の通りだ、私が悪つたのだ」と云ひたして私の前に停まり「私は尤も卿を愛さぬとか多く愛し過た様な事もせないぬつもり、左様だ」

「何も彼も忘れて仕舞ましよう」と私は瞠し乍ら云ふ。

「いいや過たものは決して復らぬ、卿も復の卿にならぬ」と云ふ良人の聲は僕かつた。

「何も前と同じにしましょうよ」と良人の肩に手を置て私が云ふと、良人は私の手を確く握り。

「過去を悲まぬと云たのは偽であつた。左様私は過去を悲しみ、再び復らぬ卿の愛情の消たのを悼む。誰が其の責に當るのでしよう？愛情は今もある、然し前とは同でない。昔あつた愛情の跡には脆い力の欠けた愛情が、取て代て剛氣と、回顧と、感謝とが残つた……」

「其な事お仰すにね、何も彼も昔の儘にしましょう出来ないうか？る？」と良人の眼許を見ながら尋ねると、眼は煌々して沈着て、唯だ眺めて居ます。私が斯く云ふ間すらも、私の願も望も出来難い事と思ひました。彼の莞爾した其の微笑には、單純な優しい處があつて、少し昔の面影がある様に思はれま

した。

凝と彼の側に立て居ると、氣も易々となる

「同じ經驗を再び繰返さぬ様にしよう、お互に偽はらぬ様に。昔の様に苛立つ事も、氣遣ふ事もなく、唯だ神様に感謝する事許り！ 求むる者もなく、煩らばしき事もない。われは已に經驗を得たし、充分の幸福を將來に得らるるのだ……今は道を譲つて、誰かを通すのが必要だ」と彼はパンヤを連て平場の戸口に立て居る保母を指さし云て「ねね左様じやないか」と結んで私の頭を彼の胸許に引寄て、私の髪を接吻する。たが其は戀人らしくなく、舊い友人の様でした。

庭からは夜の香ばしい冷氣が益々強く床しく、薫つて来る、ものゝ音も、寂寥も、一層際立て、空には星が燃る様に閃めく。

良人を見と心も俄かに平穩になつて、つね々心に蟻かまつて居たアノ道徳

的の苦痛も俄かに無なりとして彼の時の感情は、またと繰返す事の出来ぬ、丁度時其のもの、様に、再び彼の時の感情を繰返すのは難くもあり、悲しい事でもあると覺りました。左様、彼の時幸福など思つたのが、實際幸福であつたか、ドウカ？

「モ茶にし様」と良人が促がし、共に客間に行きますと、其の戸口でヴァンヤを守してる保母に會ました。私は小兒を抱き上げ、其の裸な、赤脛を、包み、胸に抱き締て、接吻しました。小兒は、嫌な夢でも見た様に、小さな手の縫れた指を擴げ乍ら振り動かし、キヨロくした眼を見張て何か探しまたは憶ひ出さうとしてるかと思ふと、俄かに其が利口そうに閃めく、眼の火花を私の上に浴せ、チヨツピリした唇が莞爾と開く。

「私のよ、私のよ、私のよ」と繰返し、體ぢう嬉しさにゾク／＼して小兒を殺しはせぬかと思ふ程抱き締め。そして其の冷たい手ども云はず、お腹ども云は

ず、手も、産毛の柔かな頭とも云はず接吻し初める。良人が私の側に來ると疾く小兒の顔を隠して、また出す。

「イワンセルゲイウイチー！」と良人は呼で小兒の小さな顔を擦ぐる。だが、素早くイバンの顔を隠す、自分の外誰も彼の顔を見る権利がないかの機に！良人は調戲ひそうな限付で私を見る

其の日から良人と私の小説は終局になる。曾てあつた思は尊くも、捨て難き思出となりました。其のかわり自分の小兒や、小兒の父に對する愛情は、全然異つた型の新生涯を形づくる様になり、そして現在迄で其の生涯を續けて來ました。

家庭の幸福了

明治四十一年十二月廿七日印刷
明治四十二年一月一日發行

定價金三十五錢

譯者兼 府下西大久保村四百〇四番地
發行者 羽 生 金 平

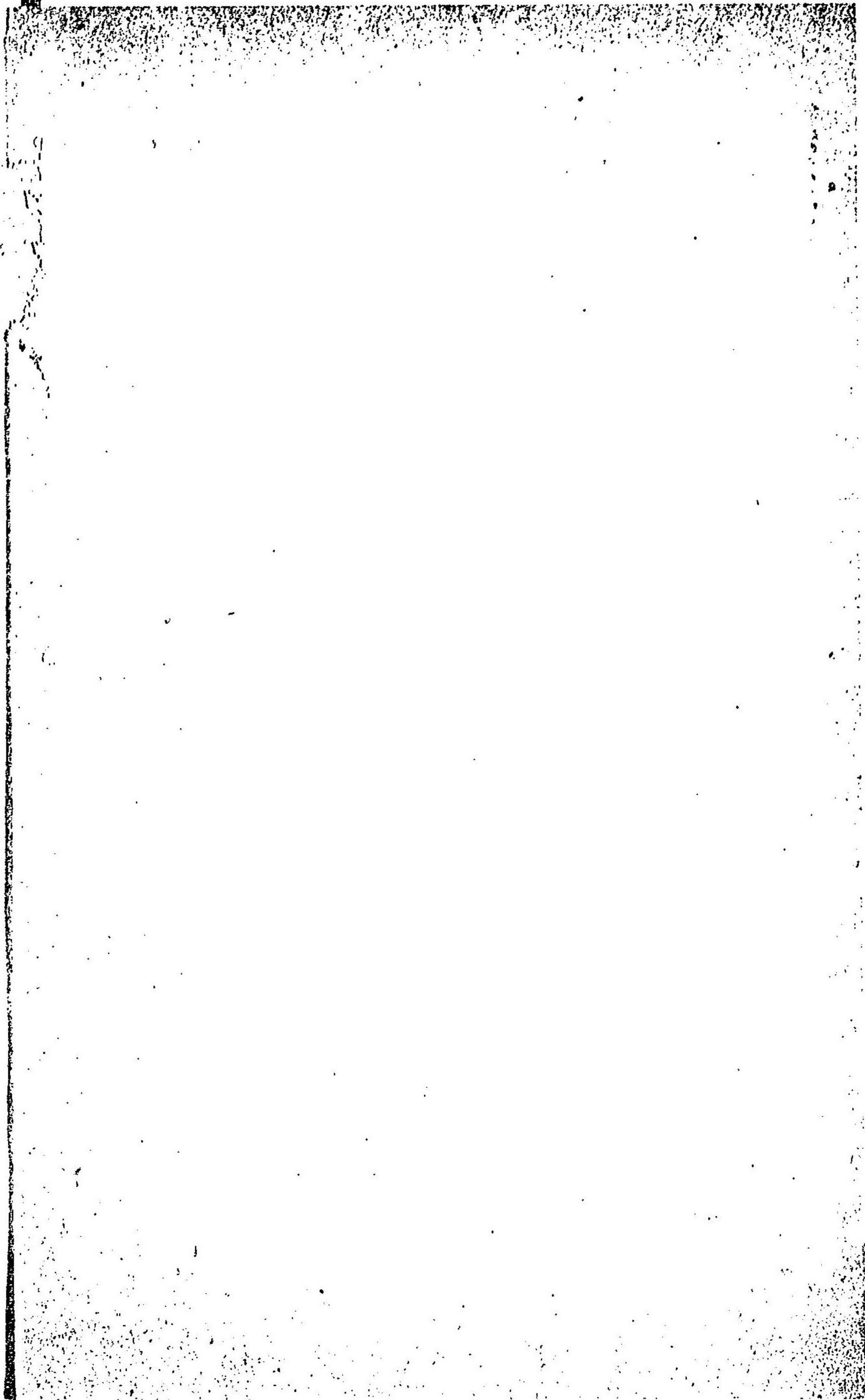
印刷者 東京銀座四丁目一番地
デー、エス、スペンサー

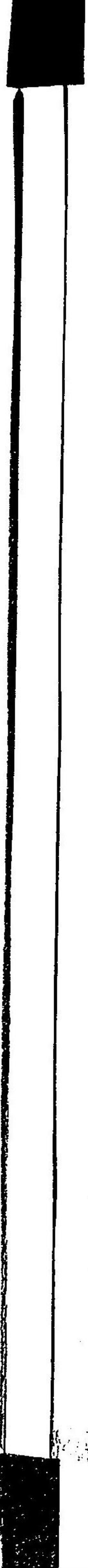
印刷所 東京銀座四丁目一番地
教文館印刷所

發賣元 東京市神田表神保町三番地
東京堂書店

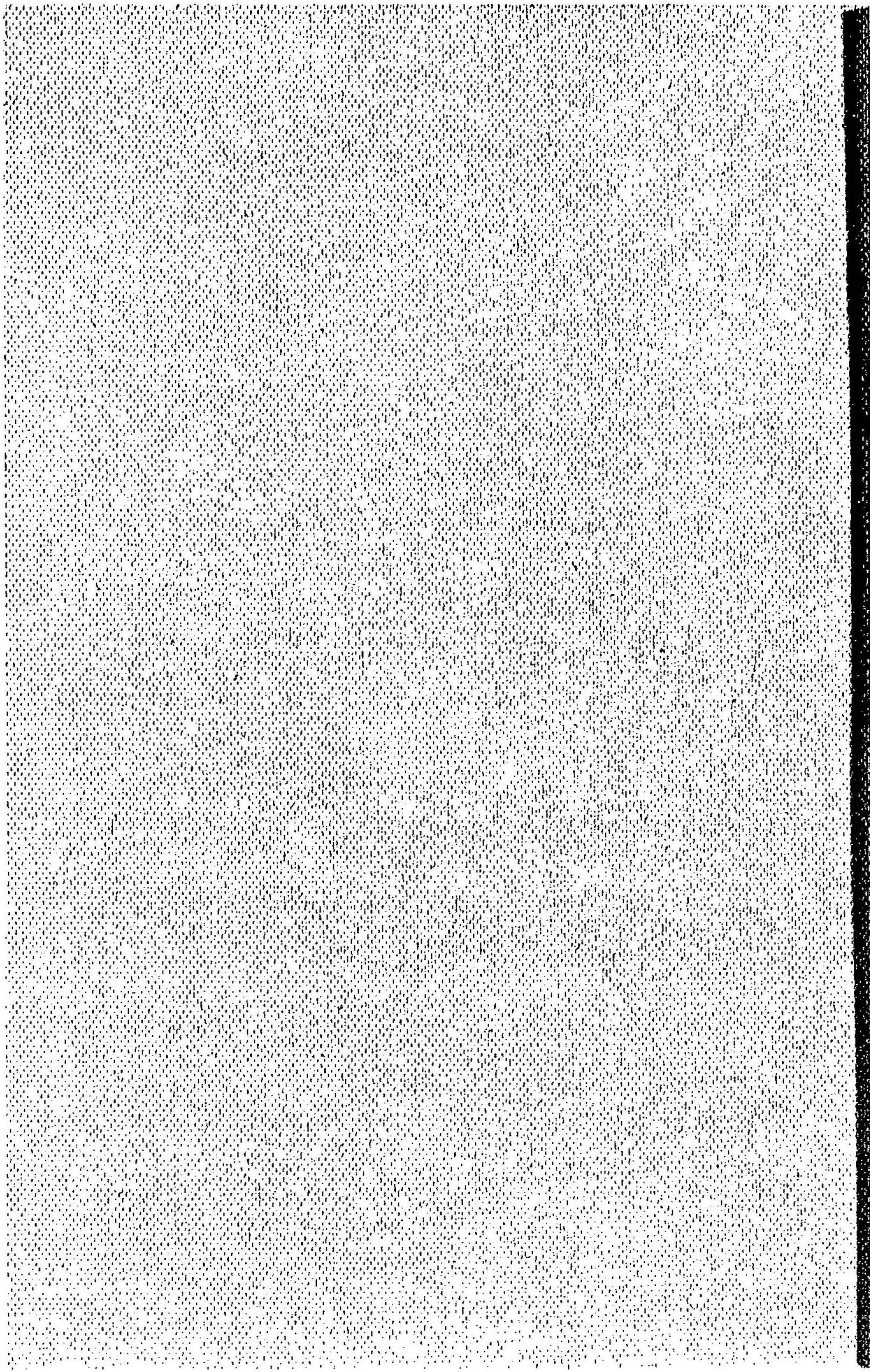


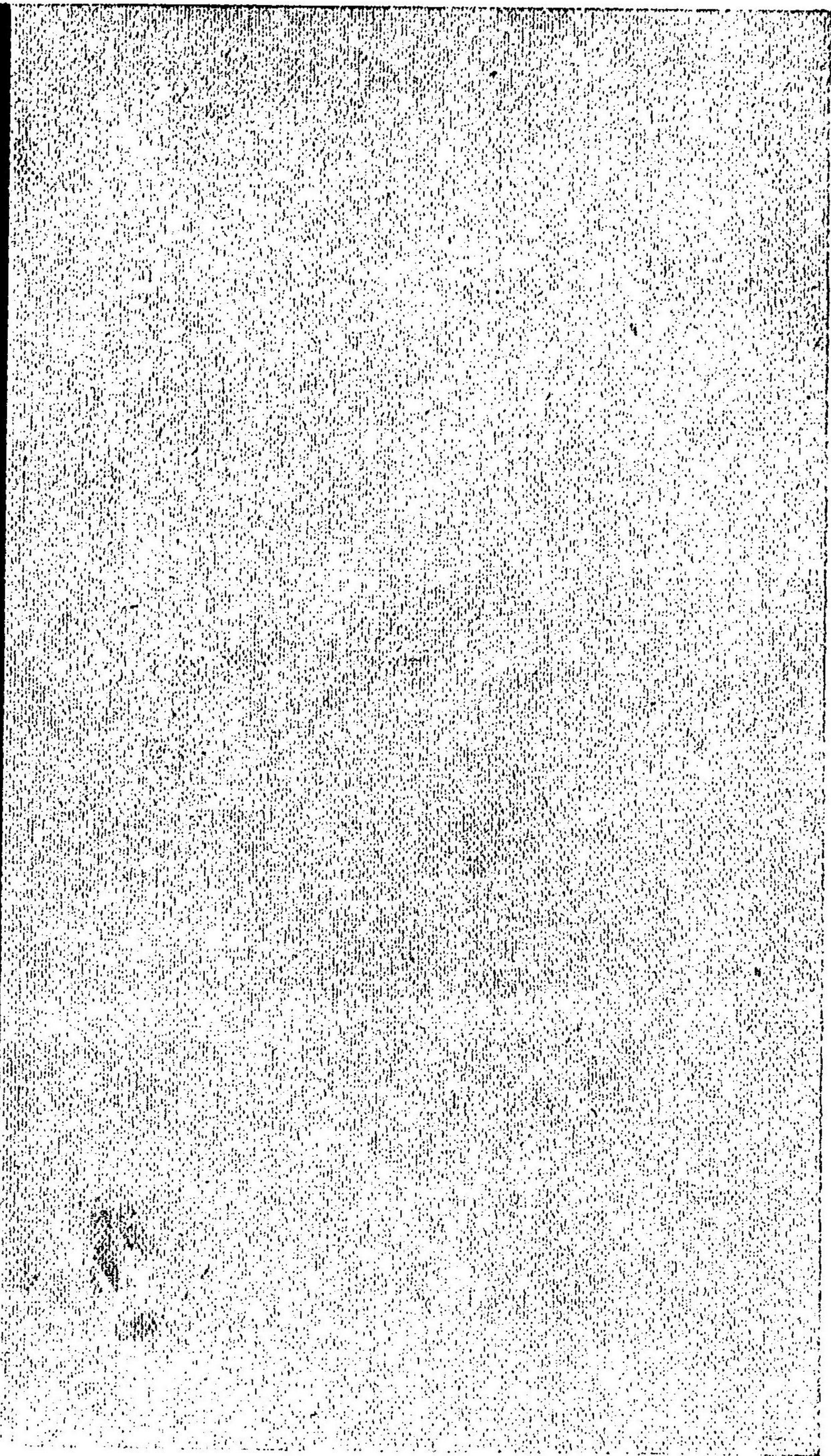
259
32





Small, faint, illegible markings or artifacts located near the bottom of the vertical line.





家庭の幸福

トルストイ

羽生白玄訳

国立国会図書館

特13

784

009303-000-5

特13-784

家庭の幸福

トルストイ/著

M42

AAE-0284



